

〔研究ノート〕

カントの「諸空間一般」(1)

瀬戸 一夫

カントは第一批判のなかで「純粹数学はどのようにして可能なのか」という問いに答えると宣言している (B20)⁽¹⁾。本研究の目的は、かれがこの宣言どおり答えを与えていると予想し、その内容を探ることである。しかし、そのためには、原典の各所に見られる不可解な叙述を、辛抱強く解説しなければならぬ。その糸口として、感性論に記された次の一節に、まずは注目してみよう。ここでは、原文の引用に加えて、むしろ不可解さを実感するために、あえて直訳に近い訳文を添えておきたい。なお、文中の〔 〕内は引用者による補足や換言などであり、以下の引用と訳文でも同様とする。

Er [Der Raum] ist wesentlich einig, das Mannigfaltige in ihm, mithin auch der allgemeine Begriff von Räumen überhaupt, beruht lediglich auf Einschränkungen (A25/B39).

それ〔空間〕は本質的にただ一つであり、空間における多様は、したがってまた諸空間一般の一般概念も、諸制限にもとづくだけである。

これは何を指摘しているのだろうか。

第1節 直観の無際限な進展と諸関係の無限性

たしかに、単数と複数の区別を原文どおりに訳出したため、よりいっそう難解になっているかもしれない。しかし、空間は本質的に「ただ一つ」であり、そうした空間のなかに、複数の制限にもとづく「多様な何か」が想定されている。そして、制限されるのは「ただ一つの空間」だと考えられることから、諸制限によって複数の部分空間が生まれ、本質的には唯一の空間内部に多様な部分空間が併存している。さらに、それら複数の部分空間にとって本質的な属性を抽象し、不可欠ではない属性（偶有的属性）を捨象すると、いずれの部分空間も「おしなべて überhaupt」包摂する概念、すなわち「諸空間一般の一般概念」が形成されるという指摘かもしれない。しかも、このように読み解けば、部分空間の集合は複数の制限にもとづき、カントが述べているとおり「したがってまた mithin auch」諸空間一般の一般概念も、やはり諸制限にもとづくだけである。とはいえ、もしもこのとおりだとすると、併存している部分空間は当然、複数であろう。このため、それらを単数形の名詞「多様 das Mannigfaltige」で指示する意図は、少なくとも即座には分からない。はたして、本質的に唯一の空間がまず存在し、その内部に複数の部分空間が併存していることを、カントは「空間における多様 das Mannigfaltige in ihm」と表現しているのだろうか。すでにこの点が疑問である。

実際、初版の感性論では、すで引用した箇所が続く項目（段落）が次のようになっていた。

5. Der Raum wird als eine unendliche Größe gegeben vorgestellt. Ein allgemeiner Begriff vom Raum (der sowohl in dem^(*) Fuße, als einer Elle gemein ist,) kann in Ansehung der Größe nichts bestimmen. Wäre es nicht die Grenzenlosigkeit im Fortgange der Anschauung, so würde kein Begriff von Verhältnissen ein Principium der Unendlichkeit derselben bei sich führen (A25).

(*) K.Kehrbach: einem.

5. 空間は無限の大きさが与えられているものとして表象される〔思い浮かぶ〕。空間の（1 フィートにも 1 エレにも共通する）一般概念は大きさに関して何も規定することができない。もしも直観の進展に無際限さがない〔際限がある〕というのであれば、諸関係の概念が諸関係の無限性〔諸関係が無限である〕という原理をもち合わせていないことになってしまうだろう。

空間は無限の大きさが与えられているようにして思い浮かべられる。カントが最初に指摘しているのは、微妙な点を度外視すると、空間に認められるこの性格だろう。すると、さきほど想定した多様な部分空間は、部分であるという、この一点からして無限ではないのだから、空間の名に値しない単なる「部分」にとどまる。したがって、無限の空間でないそれら諸部分には、無限性という本質的屬性がない。そうである以上、諸空間一般が多様な複数の部分空間を指すのであれば、諸空間一般の一般概念は没概念ないし語義矛盾となる。

次に、K・ケーアバハの校訂案を暫定的に採用すれば、1 フィートにも 1 エレにも共通する本質的屬性が抽象されて、空間の一般概念が成立すると読み解ける。つまり、1 フィートにも 1 エレにも共通し、それでいて 1 フィートにも 1 エレにも限定されず、さらにはどちらでもありうる大きさの空間として、空間の一般概念が想定されているのである。そのような空間の一般概念は、カントが述べているように、大きさに関して何も規定することができない。当然のことが指摘されていたのである。しかし、カントがこの種の考え方をしていたとすると、唯一の空間内部に多様な部分空間が併存しているといった想定は、完全に的を外しているというほかない。なぜなら、1 フィートも 1 エレも部分空間ではなく、また併存している何かでもなく、むしろ空間を制限する大きさ（長さ）の尺度、ないしはその単位だからである。なお、最終的にケーアバハの校訂案を採用すべきでない理由については、本研究ノートの第 22 節で明らかにしたい。

そして、上掲の引用箇所ですら最後に着目しておきたいのは、カントが「直観の進展 Fortgang der Anschauung」という言い方をしている点である。かれによると、直観は進展するのであり、また反実仮定の仮定文で語られていることから分かるように、直観は無際限に進展するのである。さらに、諸関係の概念はもともと、諸関係が無限であるという原理をもち合わせて

カントの「諸空間一般」(1)

いる。カントはこれを自明視して、仮に直観の進展に限界があるのなら、諸関係の無限性という当然のこと（原理）が不条理にも成り立たなくなってしまうと主張しているのである。しかしながら、かれがここで考えている「直観の進展」とは、いったいどのようなことなのか。さらに、自明視されている諸関係の無限性とは何であり、諸関係としてどのような類いの諸関係が念頭に置かれていたのだろうか。これらはまだ不明である。

第2節 難解な文面を解説する方法

解説を進める下準備として、ヨーロッパの言語は日本語と比べて名詞や名詞句を多用する傾向があり、ドイツ語はこの傾向が顕著である実情に対処しなければならない。たとえば、カントは第一批判「原則論」のなかで、ほとんど不条理ともいえそうな主張をしている。

Nun ist das Bewußtsein des mannigfaltigen Gleichartigen^(*) in der Anschauung überhaupt, sofern dadurch die Vorstellung eines Objekts zuerst möglich wird, der Begriff einer Größe (quanti) (B203).

(*) H.Vaihinger: das Bewußtsein der synthetischen Einheit des mannigfaltigen Gleichartigen.

だから、直観における多様な同種のもの一般の意識は、それ〔そのような意識〕によって或る客観の表象が初めて可能になるかぎり、或る量の（外延量の）概念である⁽²⁾。

原文と照らし合わせながら、訳文を書かれているとおりに読むと、付加語を省いた文全体の主語は「意識 Bewußtsein」であり、述語は「概念 Begriff」である。つまり、カントによると、意識は概念なのである。この点はH・ファイヒンガーの校訂案を採用しても変わらない。

しかし、名詞（句）を適宜、もともになる動詞を使った表現に改めれば、日本語として自然に読めるようになる。

だから、直観という状態〔仕方〕でおしなべて（überhaupt）、様々な

同種のことを意識している (sich bewußt sein) というのは、そのような意識によって何らかの客観を表象する〔思い浮かべる〕(vorstellen) ことが初めて可能になるかぎり、或る量 (外延量) を捉えている (begreifen) ということなのである。

それでも、まだ不明な点があるので、いくつか補足しておきたい。訳文のなかで「様々な同種のもの」としては、ポチ、シロ、クロ、ハチ公、…であるとか、太郎、次郎、花子、葉子、…などを考えればよい。直観という状態ないし仕方で意識されているのは「犬の群れ」や「群衆」である。また、そのように意識することによって個体差を度外視し、おしなべて思い浮かべられる「何らかの客観」とは、上記の例でいえば「10 匹」や「100 人」などである。そして、このとき、まさに 10 や 100 といった「或る量 (外延量)」が捉えられている。

新たな訳文では「直観という状態〔仕方〕で in der Anschauung」と意訳されているが、これは「～を期待して in der Hoffnung, dass ～」あるいは「原典で読む im Original lesen」のように、前置詞《in》が状態や方式などを表していると考えられるからである。さらに、同じ訳文で《ein Objekt》が「何らかの客観」とされているのは、この不定冠詞が「何か外国語を話しますか Sprechen Sie eine Fremdsprache?」と同様に読めるからである。付言すると、ファイヒンガーの校訂案に従って「総合的統一の意識 das Bewußtsein der synthetischen Einheit」と補足すれば、より正確になるのかもしれない。しかし、意識によって「何らかの客観を表象することができる」というのは、総合的統一の意識が成立することと表裏する事態なので、カント本人にとっては「白い白馬」のような無用の補足になりそうである。

第 3 節 一種独特の表現様式と多様の諸側面

ファイヒンガーの校訂案についてはともかく、名詞 (句) が多いドイツ語ということに注意すると、内容が読み取りやすくなるだけでなく、ときとしてカント独自ともいえそうな独特の構文がある点にも気づかされる。そこで次に、第一批判のなかでもカントの理性批判がもつ根本特徴を色濃く呈している「超越論的演繹」から、その典型的な事例 (§ 26) を引用

してみたい。なお、斜体は引用者による強調であり、以下の引用文でも同様とする。

Diese synthetische Einheit aber kann keine andere sein, als die der Verbindung des Mannigfaltigen einer gegebenen *Anschauung* *ü b e r h a u p t* in einem ursprünglichen Bewußtsein, den Kategorien *gemäß*, nur auf unsere *sinnliche Anschauung angewandt* (B161).

しかし、この総合的統一は、或る与えられた直観一般の〔説明の2格〕多様を〔目的語的2格〕一なる根源的意識において、諸カテゴリーに従い (*gemäß*) つつ、われわれの感性的直観にのみ適用されて (*angewandt*) 結びつけている (*Verbindung: verbinden*) 統一 (*die der Verbindung*) 〔説明の2格〕以外ではありえない。

この一文に見られる《*gemäß*》と《*angewandt*》の並列から、カントは《*Verbindung: verbinden*》を「諸カテゴリーに従い」と「感性的直観にのみ適用され」で修飾し、広範囲にわたる様々な結合を、カテゴリーに従い、しかも感性的直観にのみ適用される結合へと制限している。もしも《*gemäß*》と《*angewandt*》が、より近い位置にある「意識 *Bewußtsein*」「直観 *Anschauung*」「与える *geben*」あるいは「多様 *das Mannigfaltige*」を修飾しているとすれば、まったく意味不明になるか、感性に制限された有限の人間理性に特有の直観を、直観一般から区別するカントの基本構図と整合しない主張になってしまう。また、文の成り立ちからして、主語の「総合的統一」は《*als*》以下で厳密に性格づけられているのであり、述語に相当するのは「結合のそれ〔総合的統一〕*die der Verbindung*」であるから、この文——正確には命題——は伝統的な論理学の用語でいうと、最近類概念に種差を加える実質的定義の一形式になっている。ここではさらに、文末の《*angewandt*》が《*nur auf unsere sinnliche Anschauung*》を引き連れて、語順では非常に遠い名詞句《*Verbindung des …*》を修飾しているといった、一種独特の構文に注目しておきたい。

文全体の成り立ちについては以上のとおりとして、それぞれの名詞に着目すると2格（属格）が多用されているため、各名詞についてその用法を

慎重に見極めなければならない。まず「多様の *des Mannigfaltigen*」結合は、たとえば《*die Erziehung der Kinder*》が《*Man erzieht die Kinder*》の動詞「教育する *erziehen*」を名詞化した句であるように、文法上「目的語的2格」とも呼ばれる用法だと考えられる。すると、この箇所は「多様を結びつけている *das Mannigfaltige verbinden*」と読める。次に「或る与えられた直観一般の *einer gegebenen Anschauung überhaupt*」（強調点と隔字体による表記を省略）は、文法用語で「説明の2格」とも呼ばれる用法であり、たとえば「自由の概念 *der Begriff der Freiheit*」「ビッグバンという謎 *das Rätsel des Urknalls*」などと同様、主要語が上位概念を表し、2格の名詞（句）がその意味内容（内包）を限定ないし制限している。したがって、上位概念に相当する「多様」は、広い範囲（外延）をもち、そのなかでも「或る与えられた直観一般の」多様へと限定（制限）されていると読める。文全体の成り立ちが定義の一形式になっていると、すでに指摘したが、見てのとおり「結合のそれ〔総合的統一〕*die der Verbindung*」は典型的な説明の2格である。

すでに、ここまでの検討で、いくぶんかは「多様」の意味が浮かび上がった。とはいえ、明確になったのは、多様が広い範囲（外延）をもつということだけである。そこで、再び問題の感性論に立ち返り、最後に検討した引用文と似た構文がないか調べてみよう。カントは初版感性論の第1節で次のように述べている。

… *dasjenige aber, welches macht, daß das Mannigfaltige der Erscheinung in gewissen Verhältnissen geordnet, angeschaut wird, nennen ich die Form der Erscheinung* (A20).

訳出する前に、2行目の《*geordnet, angeschaut wird*》に目を向けると、連続する二つの過去分詞はいずれも《*werden*》によって「秩序づけられる」「直観される」と訳されるような、つまり通常を受動態であるのかどうか、この点が気に掛かる。というのも、たしかに過去分詞が並んでいるとはいえ、原文は《*geordnet und angeschaut wird*》になっていないからである。

ここでは、さきほど超越論的演繹から引用した一文が、思い出されないだろうか。カントの特徴的な構文である。その構文では、文末の過去分詞が前置詞を含む語群を引き連れて、遠いところにある名詞句を修飾してい

た。もしもこれと同じ形式だとすれば、二つの過去分詞がカンマで断ち切られているのは、不自然どころかむしろ当然である。つまり、並列ではなく、一つ目の過去分詞《geordnet》は《in gewissen Verhältnissen》とセットになって、その前に置かれた《Erscheinung》を修飾しているのである。さらに、関係詞節の入り組んだ構造は、たとえば《Der Regen *macht, daß* das Gras wächst》で「雨のために〔おかげで〕草が生長する」という意味になるのと同じ用法を含んでいる。以上のことに留意して訳出することにしよう。

或る諸関係で秩序づけられている現象の〔説明の2格〕多様が、そのために〔それのおかげで〕直観されているところのものを、わたしは現象の形式と呼ぶ。

そして、これが的外れの読み方ではないとすると、かなり多くのことが判明する。まず、さきほど超越論的演繹からの引用では、多様が直観であったのと異なり、ここで言及されている多様は現象である。このことから、第一に、多様は外延が大きいだけでなく、多様には複数の水準があると推定される⁽³⁾。第二に、現象の多様はもともと複数の関係で秩序づけられているのであり、第三に、現象の多様は現象の形式のおかげで、秩序づけられているとおりに直観されるのである。しかしながら、引用したこの箇所は、第二版で書き換えられている。そこで、書き換えられた文面も後ほど検討するが、初版の感性論から分かることをさらに調べてみよう。

さて、訳出した箇所を含む段落の直後、カントは次のように述べている。さきほどとよく似た表現があることに注目したい。

Ich nenne alle Vorstellungen *r e i n* (im transzendentalen Verstande), in denen nichts, was zur Empfindung gehört, angetroffen wird. Demnach wird die reine Form sinnlicher Anschauungen überhaupt im Gemüte *a priori* angetroffen werden, worinnen alles Mannigfaltige der Erscheinungen *in gewissen Verhältnissen angeschaut wird* (A20/B34).

感覚に属するいかなるものもそのなかに見出されない諸表象すべてを、わたしは（超越論的な意味で）純粹と呼ぶ。したがって、感性的な

諸直観一般の純粹形式が心のなかにア・プリオリに見出され、諸現象の〔説明の2格〕あらゆる多様がその形式で、或る諸関係をなして直観される。

現象がここでは複数になり、秩序づけられている (geordnet) という過去分詞がない点を除いて、同じ表現が採用されている。それゆえ、この箇所を「或る諸関係をなして直観される」と読むのではなく、過去分詞があったときと同様に「或る諸関係にある諸現象の多様が直観される」と読みたくなるかもしれない。しかし、もしも諸現象が或る諸関係にあって、そのような諸現象のあらゆる多様が直観されていると主張したいのであれば、カントは誤解の余地をなくするために《…, worinnen alles in gewissen Verhältnissen erscheinende Mannigfaltige angeschaut wird》と表現したのではないか。この点からして、かれは「諸現象のあらゆる多様が、感性的な諸直観一般の純粹形式で、或る諸関係をなして直観される」と述べていたのである。

ところが、この読み方が誤りでないなら、文法上は単数の「多様それぞれ alles Mannigfaltige」が、複数の関係で、あるいは複数の関係をなして直観されるといった意味になる。

第4節 意味深長な書き換え

以上で、多様には直観と単数の現象に加え、複数の現象もあることが分かった。しかし、その一方で、多様それぞれが複数の関係で直観されるとはどのようなことか、これはほとんど意味不明というほかない。理解を前進させるためにはまだ検討が必要である。

対比するために、さきほど初版の感性論から引用した箇所を振り返ると、現象の形式を定義する文脈で次のように述べられていた。

…macht, daß das Mannigfaltige der Erscheinung in gewissen Verhältnissen geordnet, angeschaut wird, …

…或る諸関係で秩序づけられている現象〔単数〕の多様が、…のために〔おかげで〕直観されている…

カントはこの箇所でも、単数の現象が複数の関係で秩序づけられると、明確に主張していたのである。かれはまた、そうした現象の多様が直観されるようにしているものを、現象の形式と呼んでいた。しかし、単数の現象を秩序づける「複数の関係」として、どのような諸関係が想定されていたのだろうか。新たな疑問が浮上する。しかも、ここで浮上した疑問は、多様それぞれが複数の関係で、あるいは複数の関係をなして直観されるということに伴う疑問と同型である。ただし、違う点もあるため、注意しなければならない。現象(単数)の多様が現象の形式のおかげで「直観される」のに対して、諸現象の多様それぞれは、感性的な諸直観一般の純粹形式で、いわば「自ずと直観される」あるいは「自ずと直観されている」のである。

すでに指摘したように、ここで問題にしている箇所を、カントは第二版で書き換えている。そこで、次に、書き換え後の文面を検討しよう。

…dasjenige aber, welches macht, daß das Mannigfaltige der Erscheinung in gewissen Verhältnissen *geordnet werden kann*, nenne ich die *F o r m* der Erscheinung (B34).

…現象の多様が、そのために或る諸関係で秩序づけられうるところのものを、わたしは現象の形式と呼ぶ。

このように、現象の形式を定式化する文脈から、直観との関わりが消されている。また、初版によると、秩序づけられているのは現象であった。ところが、第二版では意味深長に変更されて、現象の「多様」が秩序づけられるのである。しかも、現象の形式は多様を秩序づけているのでもなければ、これから秩序づけるのでもない。多様は現象の形式に誘発(machen)されて「秩序づけられうる」にすぎないのである。初版によると、現象の形式とはすなわち、或る諸関係をなして秩序づけられている現象(単数)の多様が「それのおかげで直観されるところのもの」であった。つまり、或る諸関係をなして秩序づけられている現象(単数)という、おそらくはかなり複雑な成り立ちで秩序づけられている現象の多様を、現象の形式は直観できるようにしているのである。これは読み方によって、そのような現象の多様が、現象の形式に誘発されて「自ずと直観される」(十分条件)

とも理解できる表現だといってよい。推察するに、初版では《macht, daß~》という言い方で、現象の多様を直観するためには、他の条件も必要だとはいえ、不可欠かつ最重要なのが現象の形式である、と述べられていたのであろう。そして、第二版ではより慎重かつ抑制的に、現象の形式は現象の多様が秩序づけ「られうる」ようにしている（可能性の条件）へと改められ、直観への言及も避けられたのではなかろうか。

しかし、そもそも問題は、現象であれ現象の多様であれ、さらには諸現象の多様それぞれであれ、単数のものが複数の関係で秩序づけられるとはどのようなことであり、複数の関係として如何なる関係が想定されていたのかである。現時点でも、これはまったく不明というほかない。検討から判明しているのは、諸現象の多様それぞれが感性的な諸直観一般の純粹形式で「自ずと直観される」ということ、つまり多様が複数の現象であれば、その多様は「自ずと直観される」ということであった。これに対して、多様が単数の現象であると、現象の形式はその多様が複数の関係で秩序づけ「られうる」よう誘発している、あるいは促しているにすぎない。議論をやや先取りすると、この謎は本研究ノートの最初にあげた「空間における多様」ならびに「諸空間一般」と密接に関わる。そして、この謎を解くためには、本研究ノートの第一段落で引用した文面および関連する諸論点を、より詳しく検討しなければならない。（つづく）

註

- (1) Vgl. *Prolegomena*, § 6. なお『純粹理性批判』から引用する、あるいはそれに論及する場合は、本文中でも註でも慣例に従って、たとえば初版の12ページを(A12)のように、また第二版の30ページを(B30)のように略記して該当する箇所を示す。
- (2) 「直観一般」でなく「同種のもの一般」と読む理由については《überhaupt》の用例を検討した後に示したい。しかし、ともかくも、多様な同種のもの一般の意識とは、それらをおしなべて、どれも等しく意識することだといえるだろう。
- (3) 水準の違いということに関しては、初版の超越論的演繹に見られる次の箇所も、説明の2格として読める重要な叙述である。なお、以下の註で、引用文中の斜体は引用者による強調である。Also muß ein transzendentaler Grund der Einheit des Bewußtseins, in der Synthesis des Mannigfaltigen *aller* unserer Anschauungen, mithin auch, *der* Begriffe der Objekte überhaupt, folglich auch *aller* Gegenstände der Erfahrung, angetroffen werden, ohne welchen es unmöglich wäre, zu unseren Anschauungen irgendeinen Gegenstand zu denken: denn die-

ser ist nichts mehr, als das Etwas, davon der Begriff eine solche Notwendigkeit der Synthesis ausdrückt (A106). 「したがって、われわれのあらゆる諸直観の多様を、それゆえ諸客観一般の諸概念の多様も、それだからさらに、経験のあらゆる諸対象の多様をもまた、意識が〔主語的 2 格〕総合という仕方ですべて統一する超越論的な根拠であり、しかもそれを欠いてしまうと、われわれの諸直観に対応する何か一つの対象を考えられなくなる根拠が、見出されなければならない。というのも、対象とは〔そもそも〕、概念がそれについて、こういった総合が必然であることを表しているような、或るもの以上ではないからである」。この箇所では「総合」が問題にされているため、論及されているのは「諸直観」「諸客観一般の諸概念」および「経験の諸対象」といった、いずれも複数である何らかの多様である。詳細は後ほど本文で検討したい。